Nara Women's University

過疎地域の内的・外的な動きと創意による活性化およびその支援：奈良県東吉野村三尾の事例から(月ヶ瀬を参考例として)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2009-02-12
	キーワード (Ja): 過疎地, 活性化, 支援
	キーワード (En):
	作成者: 佐野,敏行
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/701

過疎地域の内的・外的な動きと創意による活性化およびその支援
——奈良県東吉野村三尾の事例から（月ヶ瀬を参考例として）——

佐野敏行

1990年代から指摘されるようになった限界集落（住民の半数以上が65歳以上の集落）の問題が、2007年末には一般メディアを通して取り上げられるようになり、近年の高齢化社会の波と重なった農山村地域における過疎化の問題は、限界集落の問題へと移行していることが広く知れ渡るようになった。過疎現象が問題化されてから現在までの40年ほどの変化を急激とみるか緩慢とみるかは別として、現時点での少子化と高齢化に重なる限界集落化の存在は、農山村地域の生活が変動を続けていることを明確に示している。

日本における過疎現象が顕著な社会問題としてあらわれた当初、米山(1969)は、この現象を一つの文化変化とみなし、奈良県山間部の一村を事例に個人に視点をあてて、探究した。ここで米山の視点をとるとすると、この40年間に、文化変化が生じているとすれば、どのような文化的側面が失われ、どのような文化的側面が生まれてきた、きているのだろうか。新しい文化的側面がうまれてきていなくても、生まれる可能性はないのであろうか。もし、その可能性があるとすれば、その可能性を実現するための支援のあり方はどのようなものか。可能性の有無にかかわらず、地域における生活文化の持続的な活力維持のために、そうした可能性を生み出す支援のあり方とはどのようなものであろうか。

米山提言の再考

変動を続ける社会における文化変化を捉えるには、固定点を二つ設定して、両点間の比較をする危険性（クロノン、1995）を避けるために、プロセスをコンテクストの中で把握することが求められる。そこで、ここでは、米山(1969)によって提示された当時の過疎社会の実態と論考を文化変化をとらえる基点として取り上げるかわりに、彼がその当時以降の変化のあり方について提言したことを、その当時から現在に至るまでのプロセスとして想定されたこととしてとらえ、この想定されたプロセスを本稿の分析枠組とすることにする。米山（1969: 208-211）の提言は、過疎社会の今後は「適疎社会」への移行により展望が開けるという考えをもとにしたもので、具体的に四つあった。すなわち、(1)ムラの過去を追わないこと、(2)個人の選択を尊重すること、(3)生活は都市との平等を目指すものであること、そして、(4)あたらしい血を入れること、であった。

各提言について、本稿の対象とする東吉野村の三尾集落（地区）の現在に照らし合わせて、本稿で扱う中心的課題の位置を確認しておくことにする。最初の提言に関してみてみると、数十年前は「三尾は大和の大阪」といわれたほどの賑わいがあったという言い伝えが続いているものの現在の姿はその面影はないために懐旧の念にかられる状況にはない。また、現在二期目最後の年の区長が、任期中にしたことは、区の財政の健全化のための区費の徴収方法の改正であり、それまで林業収益の一部を財政の主要な財源としていたことからの脱却の意味し、過去の「遺産」への依存からの決別が進んでいることを意味する。村の文化的財産については平成4年に「東吉野村史」が上梓されることで記録に残され、今でも三尾区長が計画しているように「村史」から抜けている各集落に固有の無形の文化についての記録化の必要性は残されているものの、ムラの過去を追う姿勢は皆無に等しいといってよい。

二つ目の提言である個人の選択を尊重することに関して、三尾地区を対象にして授業の一環として行った学生のフィールドワークの調査項目にファミリ・ヒストリーの採集を設定して実施したところ、各家族での人の出入りの動きには三尾地区全体を包括するような時代性を反映するパターンを見出せないという結果になった。このことから、個々の家族が、構成員のライフコースに合わせて、個人の出入りを「許している」と言えるだろう。

むしろ、可能性を壊さないために次の世代にたいして出ることを促してきたといえるだろう。個々の家族の姿は、話しを聞いてみると、個々別々であり、似ている家族を見出すことができず、また、個々の家族をみると、身内や親族が東吉野村以外で生活していたり、活躍していたりする人がいて、そうした人との繋がり方も個々の家族で異なることが明らかとなった。現在、三尾地区に残っている人の中には、個人の選択の自由が制限されていた時代の影響を引き続き受けている人が存在する。しかし、その人たちの次の世代（５０代以下の）は、そうした制限に縛られる人はいなくなっているといってよい。

三つ目の提言は生活様式の都会と田舎の違いの解消に関したものであった。都会とは異なる構造をもつ家屋は、三尾においても300年の歴史をもつイエが100年近く前に建てられた家屋を使用している例のように、残っている。しかし、近年の増改築時に、地区に特異的な設計の仕方が用いられることは少ない。また、食料は自給的な生産に地元に数軒しかない商店での購入という限定的な選択肢に、自家用車の普及による少し離れた町でのスーパーマーケット利用も加わった。電気製品や日用雑貨などの物質的な面でも都会生活者と変わらなくなっている。さらに近年ではケーブルテレビの普及とそれに付随するインターネットのセット利用が進み、三尾においても都会と同様に情報を得たり発信したりできるようになった。このように、米山が「生活」ということばで意図した生活の物質的な側面や情報的側面に関して、都会と田舎の平等は達成されているといってよいだろう。

最後の提言として「あたらしい血を入れる」ことを唱えたときの米山の意図には、外からの動きを取り入れることだけがあったわけではなかった。次の引用にあるように、内からの動きを大切にすることが同時に意図されていたのである。「若者で村に残りたい人たちには、積極的な援助をあたえていい。その人たちの創意を活用してゆくところに、かならず新しい地域社会の健全な発展が期待できるだろう」（米山 196: 211）。これからすると、むしろ米山は、内からの動きを重視していたといってよいかもしれない。米山の提言時から今日まで、過疎地各地で内外の動きが様々にみられるようになった。東吉野村も例外でなく、山村留学、温泉宿泊施設の開設、木材資源を活用したログハウス建設によるセカンドハウス地区の開設、スキー場の開設、著名イタリアンレストランの開店など、役場および民間による村の発展のための努力がなされてきた（「東吉野村史」　参照）。その多くは、特定の目的のための補助金の機会であったり、都会人の関心の動向を捉えようとしたものであったりして、外からの動きと関係したものだった。しかし、東吉野村の場合、外からの動きに持続性を期待するだけで、その持続性を内から保持する手だてをもっていなかった。つまり受け身的な対応であったために、単発や不発に終わったり、村の発展とは無関係な外からの動きが進んだだけであったりした。

こうした推移の中で、米山の最後の提言にある期待、すなわち、村に残りたい若者たちは存在したのだろうか、そういう若者たちに積極的な支援が与えられてきたのだろうか。そういう人たちの創意は見られたのだろうか、そうならば、彼らの創意は活用されてきたのだろうか。こうした疑問について、以下で具体例を検討していくことにする。東吉野村全体を対象とすると個人の生活の場面を捉えるには大きすぎるので、この村の中の集落（かつての村であり、現在の大字あるいは地区）の一つで、自治会によるまとまりを保持している三尾地区を対象にした。資料は、主に聞き取りと観察により収集した。

聞き取りは、平成18年(2006年)の秋から開始し、主に三尾地区の区長（同時に自治会の理事長）を対象に行った。観察と三尾地区の住民への聞き取り（20戸）は、平成19年(2007年)6～7月に学生8名とともに現地に訪問しておこなった。学生とともにおこなった聞き取りは、戦後の各家庭における家族の出入りの変遷とファミリ・ヒストリーの収集および地区の将来にたいする認識についておこなった。その成果は、現地で住民の方々を対象にした報告会で公開した。この学生とともにおこなった現地調査については、前述し

た「外からの動き」の一つとみなし、学生にとっての意義と、地区や村の人々にとっての活性化に向けた経験の蓄積としての意義、そして、過疎地（限界集落）の安全で安定した持続的生活の支援のあり方の模索の面から、後ほど検討することにする。

三尾における内なる動き

ここで、米山の最後の提言から派生した疑問について、三尾の事例をもとに考える。米山が提言をしたときに、三尾において若者（20 代、30 代）だった者のうち、そのまま三尾に残った者が数名いる。そのうちの一人が、聞き取りの対象である現在の三尾の区長である。区長や他の住民の話からすると、かつての若者たちは、残りたくて村に残ったというより、むしろ残らざるをえなくて村に残ったのであった。区長の場合、村に残った理由には先祖伝来の土地を守る意識が色濃く影響していた。他の残った者の意識にも、この理由が残った理由の中に多少ともあったことが推察される。しかし、三尾地区に残る家族をみると、家族ごとにライフヒストリーが異なり、100 戸に満たなくなったこの集落における家族のあり方は都会と同様に、それぞれが別個であることが、聞き取りから明らかとなった。30 年前に若者であった者が現在も残って生活している理由や残らざるをえなかった理由には、家族それぞれの固有の理由が絡んでいたと理解すべきであろう。

残った理由が具体的に何であるにしろ、米山が述べた「村に残りたい若者」とは、個人の意志と判断で残りたいという意欲をもつ若者であったとすると、三尾地区の場合、そうした若者はほとんどいなかったといってよいことになる。区長の場合、他の数名の先輩住民と同様、村内の公立学校の教員を定年退職した後に区長に推された人で、村での生活を続けるために教職についたのである。他の過疎地域と同様、役場、学校、農協、郵便局などの公的機関への就職が安定した生活を確保する手だてであった。区長は、教員として公職に就いているときは三尾の自治会に関わることなく、定年退職後に地域の自治会の理事長かつ地区の区長となり、当人の言うように「地域へのご恩返し」をしていく中で、ようやく地域のことを知ることが出来るようになったという。地域の活性化に携わるようになったのも、地域のことを良く知るようになってからのことであった。このように、30 年前に若者であった者がそのまま村に残ったのは村内で安定した職についたからであり、その間は、地域について、住民として最低限のことは理解しても、地域の活性化との結びつきや、地域における安全で安定した生活の持続的発展について何かを考えることはなかったというのが、区長自らの述懐であった。このことは、世代的に近い者で三尾に残ったかつての若者だった人たちにもあてはまることであろう。こうして、各地で地域の活性化が唱えられるのを耳にしながら、自らの居住地も例外ではないことを感じていても、「地域社会の健全な発展」につながる地域の状態の把握は、そこで生活している個人のみならず家族にとっても容易なことではなかったと推察される。問題は、問題意識の有無でなく、もはや、ライフスタイルの問題であり、集落のために個人も家族も生活しているわけではない時代に入っていたのである。

仮に 30 年前に若者であった者が村に残ったとして、どのような積極的な支援が彼らにたいして与えられたと想定できるだろうか。筆者は三尾の過去 30 年におけるそのような例を聞いたことはまだない。しかし、現在、三尾の近隣の地区の若者たちが、村の神社の秋祭りに用いる、その地区伝来の太鼓台が良質の木材と造りの精巧さにより貴重な文化財的価値を有するという外からの評価に気付き、平成 19 年に、その地区で太鼓台保存会を立ち上げた例がある。この活動を支援し、こうした内からの若者の動きに期待していることが、三尾の区長夫妻の話から知ることができた。この太鼓台保存会が平成 20 年 2 月に発行したニュースレター2 号には、昨秋の祭りに際して、この保存会に寄付した氏名が住所の所在地域別に掲載してあり、「地区内」「村内」「県内」「近畿県内」と各所からの

その地区の出身者や出身者の友人知人からの寄付があったことがわかる。このことから、こうした内なる動きにたいする支援が、地元地域を越えて生じる時代になったことが理解できる。この内なる者の創意の発揮が、三尾地区の場合、後に詳述するように、区長による地域活性化の試みの形となって現れたのである。

三尾の区長の創意は、若者時代でなく、定年退職後に発揮されたことになる。正確には、区長としての2期6年の活動を通す中で発揮されたのだった。それだけの自らの地域にたいする思いが若者時代にあったならば、当時すでに創意の発揮ができたかもしれない。しかし、当時は、若者の創意を活かす支援的な環境が充分に無かったと推察される。内なる者の創意は、若者にとっても退職者にとっても、支援環境なしには、実現しないといえる。

退職者による創意は、40年前に米山が期待していなかったことである。三尾区長の場合、創意をもつ発端は当然ながら区長の立場から地区の活性化に関心をもったことにあった。ここに特別なことはない。三尾区長の独自性は、地区独自の外からの動きを捉えて、地区の活性化に活かす最善の活かし方を創意したことにあった。それだけでなく、さらに、一つの契機から別の契機につなげるかに創意を発揮したことにあった。こうした創意を支援する環境は、自助努力だけでなく、以前と比べものにならないほど、多様化してきたことも特徴である。また、三尾区長自身がしばしば海外を訪問しているように、国際化が都会だけのものでなく、地域社会のものである可能性を求める態度をもっていたことも特徴である。こうして、過疎地に海外からの嫁を受け入れるという内からの動きの延長上でなく、中国人研修生の受け入れという外の動きを内に取り入れるという創意でもって、過疎地に国際化の一端を果たさせることにしたのである。

この三尾区長の創意の例は、内なる人の動きが、村内の人による活用の枠を越えて、村と無関係の人との連携により活用されて、実現しうることを示している。また、創意は、地域に閉じた形で単発的に活用されるものではなくなり、創意者本人が、自分と地域の資源を熟知し、外のさまざまな動きとの柔軟な対応関係を持続させながら、再帰的（リフレクシブ）に、当該地以外の他人との相互作用的関係のプロセスの中で、活用していくものであることを示している。ここで再帰的に活用するということは、一つの課題への挑戦を通して、一つのつながりができ、一つの結果がもたらされたときに、そのつながりと結果に、さらに自分がどう関われるかを知るために、自分から次に何をもたらすことで自分に何がもたらせるかを考えることである。そうすることで、次に目指す課題が明らかにされ、それへの挑戦につながるのである。こうして、持続的に新しい課題が提示されて、異なったタイプの取り組みに対応していくという流れが生じ、積極的な結果がもたらされることになる。もたらされる結果は、最終のものでなく固定されるものでもなく、このような再帰的で持続的なプロセスを経て、次の挑戦の出発点となることが肝心な点である。このようにして、異なったタイプの結果がまさに持続的にもたらされれば、それぞれが地域にたいしてプラスの効果をもたすと考えることができるだろう。

中国人研修生受け入れ事業を通して

ここで、具体的に、三尾の事業例をみてみる。

事業例の概略。村内の道路工事のための事務所・宿舎が三尾地区の旧農協施設に置かれる。1年半の工事終了により不要になった事務所・宿舎を、付帯の機器・設備とともに三尾地区の自治会が譲り受ける。この建物を地区の活性化の一助にするために利用策が考えられ、改修して古い木造の区民会館の代わりに、新しい区民センターとして利用することにした。改修に必要な経費を区費から調達する準備をする。地区出身者で村外で活躍する人に地区の活性化のための支援を得る方針をたて、地区出身者に改修工事の依頼をし、工事および経費の協力が得られて、第一段階の改修が済み、区民の会合や葬礼に利用できるように

した。地区や村への訪問者が滞在を必要として、その宿泊先として利用する機会が何度かあった。このことから、滞在が可能な施設への充実化が次の目標となった。

新しい区民センターの紹介がメディアにのり、それをみた人の仲介により、日本政府の研修生制度に関わる中国系会社組織が、三尾の区民センターに関心をもつことになった。この会社組織は、中国人研修生の受け入れと、その直後に行われる初期集団研修を実施し、その後、契約企業へ研修生を送り出していて、初期集団研修（「日本語職業用語強化訓練と日常生活教育指導」）実施場所を探していたのである。この会社組織と三尾区自治会との交渉が開始された。交渉の中で倉庫をレンタル・シャワーと簡易キッチンの設置が指摘され、これらを設置後、平成 17 年 11 月に、最初の中国人研修生の受け入れ（当初 20 日間、その後、土日休みで 4 週間）を実施した。

区民センターをさらに有効活用させるために、一般の人が泊まれる簡易宿泊施設に改修することにし、最初の改修工事と同様、地区出身者から施工と経費の支援を得て、シャワー室とキッチンを常設化し、消防法上の設備設置をおこない、平成 19 年春に一般宿泊者の受け入れ可能となった。この施設をどう中国人研修生以外に利用してもらい、地区の活性化に資するかが新たな課題となった。その課題を持続的に取り組むための人的体制として、三尾区長は、区民センター事業部を新たに立ち上げ、区長が平成 20 年 3 月で退任した後も事業部メンバーとして区民センターの今後の展開に関われる体制を整えた。

過疎地域の一集落である三尾地区が、どの程度、どのような形で国際化の一端を担ってきたのだろうか。研修生の受入事業を担う事業共同組合との年間契約を交わし始めてから、実際に研修生が三尾地区に来て研修したのは、平成 17 年度 2 回、平成 18 年度 3 回、平成 19 年度 5 回であり、研修生数は合計 195 名となった。日本語講師一名に引率された研修生は区民センターの二階に滞在し、一階のホールで学習する。各回の修了式で、研修生による日本語スピーチが、研修先となる企業からの参列者に披露される。区長の挨拶もあり、今後の研修生の健康と活躍が述べられる。修了時に研修生から三尾に滞在していた経験の感想が述べられ、区長にとって三尾が第二の故郷といわれることが嬉しいことであり、区長自身も中国語を習って、中国人研修生の短期受け入れを文化的交流の機会ととらえてようと心がけている。

研修生一行と地区の住民とのつながりは、主に区長の音頭によっておこなわれてきた。例えば、区民への参加を呼びかけ、研修生・講師の協力を得て、餃子づくり教室、カラオケ大会、中国語勉強の会を実施し、研修生・講師に呼びかけて、祭事などの年間地域行事への参加、餅撒きなどへの参加を誘い、そうしてもらってきた。また、区民の有志に声をかけて、巻き寿司の作り方教室や、区民のための中国料理講習会などからなる日中料理交流会も開催してきた。

一人の研修生にとって、三尾での一ヶ月の滞在は短期間にすぎない。しかし、空港に到着してから落ち着いて生活を始める最初の場所であり、伝統的な行事にも巡り会える土地で生活した印象は、それなりであることが修了時に残していく寄せ書きから伺える。一方、三尾の人たちにとって、研修生の短期受け入れに対して区民一体となった歓迎となったわけではなかった。区長によると、当初、一部の区民から「怖い」「蔑視」がみられた。しかし、受け入れを重ねるうちに、研修生のほとんどが既婚者で家族を残して日本にきていることを知ったり、彼らの真面目さ、礼儀正しさ、率直さに触れたりして、否定的な反応が無くなり、次の来訪を楽しみにするほど肯定的な反応に変わっていったという。

このことは、安全で安心した地域生活のための活性化事業の実施に、計画段階および事業の初期段階に「不安」の時期を経ることを示している。さらに、集落全体のための事業と考えていても、人口が 200 人に満たない地理的独立した集落における一体性を生み出す契機にならないことを示している。前述したように現在、過疎地においても家族はそれぞれに異なり、個人はそれぞれに自分の人生を送っているために、かつて考えられていたような一体性は消散しているのである。かつて三尾が林業を中心にして成り立っていたとき、林業を生業とする家族が多ければ共通する課題や話題があり、同様の価値観を共有するこ

とが集落全体の一体感をもたらした時代があった。その時代から、それぞれが異なる生業をもって生活する時代に移り、異なる価値観をもつ人間が同時に同じ集落に生活するようになった。現在、三尾は、多様な個人と家族が共生する生活の場となっているのである。

このことを如述に物語るのが、自治会の財政（三尾の場合、地区の財政といってよい）の変化、つまり、収入源のあり方の変化である。本プロジェクトを開始してから、三尾の区長と 11 回にわたり話を聞く機会をもち、そのうちの初期の頃と最終の時の数度にわたり、区長は自らの話の中に三尾の財政のことをもちだした。筆者は主に地域の活性化に結びついた話を聞くことに関心があることを知りながら、区長は自治会の財政について詳細な話をしたのである。当初、その理由を理解できず当惑したこともあった。しかし、前述した活性化の一つの手だてとしての中国人研修生の初期集団研修の受け入れの土台を作ったのは、新設の区民センターという「箱もの」であったのであり、この新設のための財源がなんとか確保できた段階で、地区出身者による施工と財政的な支援を得ることができたおかげであった。地区出身者による財政的支援は、偶然でも幸運でもなく、世の中の流れの中で、個人事業者が社会貢献をすることの意義が少しずつ社会的に浸透してきたことが背景にあった。つまり、この地区出身者は、出身地への社会貢献の一つとして人的財政的支援を行ったのである。地域の活性化と財政は今後ともに、以前よりももっと複合的な要素をもった関係にあり続けることが示唆されている。

三尾地区の財政は、現在の区長が区長に就任する前まで、地区の木材を売却した収益の一部が財団法人化した自治会の財源として確保されていた。ここ 30 年来にわたる林業不振により、その財源は毎年の新たな収入源の役割を果たさなくなった。このことは、共有された資産が減少し、地区の慣習や有形無形の精神的支えや文化財的な財産の保持・維持・運営にあてる財源がなくなり、各戸から徴収する自治会費が増すことを意味した。そこで、区長はこの自治会費の徴収の仕方を在任中に改正したのだという。一人暮らしの高齢者、住民票に記載がありながら村外に居住する者、その逆に住民票がなくても週末などに地区に戻って生活する者、生活保護を受けている者などと住民は多様であり、それに一律の自治会費の設定という合理的な考えがある。しかし、実際の生活実態から分類して徴収額をスライドさせる考え方のほうがより相応しいものであると考え、区長はこの考えをもとにした改正を実施した。予想されることであったが、地区の活性化の財源として自治会費への依存の比重を強めようとしても、実際には、住民の中に自治会費を支払わない意思を表示する人がいて、自治会費に関わることも複雑化の様相を示している。

区長は、財源の見直しの他にも社会組織上の配慮をしなければならなかった。それは、地区内のいくつかの輪番的な役回りや、旧来から引き継いできた区内をさらに小さな班にわけて、班ごとの寄り合いの主催者の持ち回りなど、すべて旧来どおりに回転・運営することが人手不足で困難になっていることにたいする配慮である。この実状への対応策として、地区内の婦人会が解散したように、廃止したり、回数を減らしたりすることで実際に対応してきた。

以上のような、地区内におけるライフスタイルの変化を目の当たりにして、区長は、旧来の方式に代わる新たな方式、そして新たな方式を支える新たな考え方の創意を試みることを課題として認識するようになり、そうすることでさらに区長はこの区のことをよく知るようになったという。こうして、地区の今後の活性化のあり方の土台を作ることが挑戦すべきことになったのである。

この挑戦の線上に、中国人研修生の受け入れがあったのである。それを今後、続けるか、どう続けるかが現在の挑戦すべき検討課題となっている。中国人研修生の受け入れの問題点は、研修生がいつ入国し、利用しにくるかの予定が作成できてもビザなどの渡航上の問題などで変更がおこりやすいこと、毎回の人数が 5 人～20 人と幅があることである。この

ことは、地区の収入源としてみた場合、不定期の収入源であり、安定した地域生活の持続的な維持に寄与できないことを意味するかにみえる。しかし、地区内の大きな事業は定期的というよりも不定期的に営まれるものが多く、受入事業がまったく寄与しないわけでないことも事実である。近い将来、研修生制度そのものが大きく見直される可能性があり、見直しにどう対応するかが取り組むべき課題の一つになっている。

学生フィールド実習を通して

平成19年5月末と6月初めの週末を二回使って、学部生6名と院生アシスタント2名による学部の実習を三尾でおこなった。[1] この実習の成果の報告会を7月上旬の夜に三尾区民センターで開催した。20名ほどの地区の住民の方々の参加と、当時、研修中であった中国人研修生と中国人の日本語講師も参加した。

実習の目的の一つは、戸別に戦後期からのファミリ・ヒストリーおよび地元三尾地区の将来像について聞き取りをおこなうことであり、もう一つの目的は、観察による学生個人の現地の把握と、住民の方々への聞き取りをもとに、三尾らしいシーンをビデオで撮影し、撮影したシーンを編集して、三尾らしさを伝える20分程度の映像プログラムを作成することであった。また、こうした実習の成果を報告会で公表して、住民の方々に地域の活性化を考える機会にしてもらうことも目的としていた。

学生のまとめた報告の内容と、作成した映像プログラムの内容から、過疎地域活性化のための支援に関連して、明らかになったことは、まず、学生にとって、現地滞在は新鮮な経験であった一方で、2泊3日の実習を2回おこなっても、学生にとって、現地の生活の理解は、充分でなく、深い理解にはならなかった。それが端的に表れたのは、学生の編集した映像プログラムの内容であった。慣れていないビデオ編集作業を限られた時間でおこなうことは技術的問題があり、撮影の日時・季節の限定性から撮影場面の選択の幅は限定的であった。しかし、シーンの選択をする過程に、学生の現地の生活・環境条件の理解に適合するシーンの選択を課題にしたにもかかわらず、三尾らしさを表現できたかというと、そうでなかったといえる。

学生によるシーンの選択の特徴を知るのに次の二つシーンが示唆的である。（1）三尾地区が氏子になっている神社の水神祭の祭事後の直会に供する朴葉寿司を女性が神社の台所と直会会場で作っているシーン。女性たちは、三尾とは異なる地区の人たちであった。（2）三尾で数少なくなった林業で生計を立てている人が、山林での伐採の仕方を見せてくれたシーン。これら二つのシーンはどちらも学生にとって印象深かった情景であることは確かである。

しかし、学生に与えられた課題は三尾らしさを映像をとおして把握することであったにもかかわらず、（1）と（2）のどちらのシーンも三尾の集落で撮影したものではなかった。なぜ、三尾の集落内に三尾らしさをとらえたシーンを捉えられなかったのだろうか、捉えていたとしてもなぜそれを編集の際に残せなかったのだろうか。また、（2）のシーンは登場人物が、報告会参加者に馴染みの人であったので、上映したときに、参加者同士でシーンについて語りあうほど反応は良好であった。ただ、二つめの学生グループも同じシーンを入れていて、何か別のシーンが紹介されると期待していた参加者にとって期待外れとなった。なぜ、二つの学生グループが、似たような編集の選択のしかたをして、木を伐るという活動を、三尾らしさを示すビデオの中に含めたのか。そうした選択の仕方に何が影響を与えたのか。

学生にとって、三尾を含めて村一帯でおこなわれている伝統的な朴葉寿司は、三尾の一つの要素として取り上げるのに相応しいと考えられた。その製法をみるには、神社の恒例の祭事においてか、一般家庭に訪問してかして見せてもらうかしかない。伝統的な風習の

一つであるというイメージは外部の者にとって把握しやすい。しかし、報告会で、ビデオ上映しているときに、参加者の半数を占めていた女性の間で、映像の中の朴葉寿司の製法が自分たちと違うことが語られたのである。押し寿司であるために木箱を必要としていて、女性の多くはその家で使用されてきた手作りの木箱をいくつかもっている。箱自体の大きさも規格化されたものがあるわけではない。また、すし米を作る段階の調味料の調合の仕方も作る女性ごとに異なる。実際に、三尾の一人の女性は朴葉寿司の製法のとくに味付けに関して企業秘密にしているほどである。

ビデオの中で神社の祭事のために朴葉寿司を製造していたのは別の地区の女性たちであったことに、参加者の女性たちは、製法の違いを口にすることで応じたのであった。このことを学生の中にも受け止めることができた者がいた。その学生にとって、伝統的な食べ物の製法がいくつもあるということを知るきっかけになったのである。学生にとって、このことを明確に理解する機会を得たのはこのときでであった。それまでは、漠然と東吉野の伝統とは、東吉野すべてで共有されていることだと想定していたのである。しかし、実際は、同じ伝統的に受け継がれているものであっても、地区毎の違い、家族毎の違い、あるいは、個々人の違いがあること、言い換えれば、長い間、ある地域で伝えられてきたことは、人によって多様に受け継がれていることが理解できるきっかけとなったのである。つまり、そうした理解を得るまでには、思い違いであっても自分の感じたこと考えたことをそのまま相手に伝えうる過程が必要であることを示している。

木の伐採が二つのグループで重なったことについて、報告会の席上、学生に一人が説明したのは、それが学生たちにとってそれほどまでに印象深い経験であったからということだった。林業が東吉野村全体の特徴的な産業として常に語られることから、林業と三尾も一つのステレオタイプ的に理解されている。しかし実際には前述のように、林業を生業としている戸数は三尾においては現在わずかで、実際に林業の仕事をみる機会は少なくなっている。学生の訪問期間中に伐採の様子を目でみることは、三尾での伝統的な林業の一端を実感できたことになるので、学生による報告会の説明となったことは不思議なことではない。しかし、三尾の住民にとって林業自体が共有される生活経験ではもはやなくなっていることから、三尾らしさを示す特徴として表現されることではなくなっていることを捉えなければならない。ここで明らかなことは、かつて存在していたと考えられる集落の住民が共有する時間や、共有できる考え方を持つ機会が減少してきていること、外の世界との関係で個人のレベルで選択する機会が増えたことである。学生には、共有感覚や共通意識が農山村地域では都会よりも残っているとステレオタイプ的に考える傾向と、それらが残っていて欲しいと考える傾向があるために、学生が三尾らしさと考えたことと、三尾の住民が三尾らしいと考えることとの間に微妙なずれをもたらされたといえる。とくに、そうしたずれが、人の登場するシーンで現れたことは重要な点である。こうしたずれに気づき、ずれを活かして創意をのばすことが活性化の支援に携わる者にとって必要であることが示されている。そのずれに気づく機会を与える過程を経ることの必要性は明らかに重要であり、その機会を捉えて、次にどのようにずれを解消するかが、外からの支援者に求められる挑戦の一つであると考えられる。

月ヶ瀬の伝統工芸品（奈良晒し）の生産を通して

現在、奈良市内に編入されている東部山間部の月ヶ瀬は、編入以前の 1980 年代のいわゆる村おこしの動きの中で、奈良晒しの生産地とし再び知られるようになった。この動きの中で、村内の文化的資源の再確認を契機に開設された伝承教室を母体として保存会が生まれ、現在まで継続されてきている。この布生産自体は月ヶ瀬の集落に特異であったわけではなかった。生産地の最東部に位置していたことから、奈良市内に近い他地域の生産が

終息した後も生産地として残され、明治期以降、奈良市内の商家による集落内の工場設立や、伊勢神宮へ神官衣裳の材料として納める役割を果たしてきた家族がいたことが、今日の保存会を成立させる背景となったのであった。

1980年代の全国的な村おこし(活性化)の動きのなかで、保存会維持のための若干の財政的支援を村役場がとったことをきっかけに保存会活動に展開し、現在まで活動の波が上下しながらも、布の生産は保持さてきた。会の発足後約20年の間、この会の存在は、結果的に村おこし（活性化）に貢献してきたのだろうか。現在は奈良市に編入されたため、村の活性化の脈絡でこの会の貢献を評価することはできなくなった。できなくなったことが、ある意味で、かつての村の活性化に大きな貢献をできずにきたことが免ぜられる形になり、一方、会のメンバーとして参加している女性たちは、2000年前後から集落とは係わりのないいわゆる部外者が、個々に自家用車を用いて月ヶ瀬まで赴き、奈良晒の生産を「趣味」の活動の範疇で、布生産の保持に貢献することになった。文化財の保存・伝承（無形の技術の伝承）の枠組みから外れたことが、結果的に持続性発展の可能性をもたらすことになったともいえるのである。

この例は、村の中にある「貴重」な遺産の保護・保存・伝承という名目が、村の活性化に貢献しづらいものであったことを示している。同時に、集落に特徴的なことを持続的に保持していく人間が存在することが新しい展開を引き出す潜在力として不可欠であることを示している。そして、その潜在力が保持されていることで、集落の外の人との連携が生まれて、この連携が安定的な集落のあり方に寄与するという連関が生じることになりうることを示している。つまり、「こだわり」をもって伝統的なことに関わりつづけることが地域を越えた支援を得たり、連携を生み出したりすることになるのである。その結果、複合化する地域の安定した持続的発展のしくみの一翼を担うことになりうるのである。

結論

外の人の考えや動きを参考にすることと、中の人の誰かの創意を期待しそれを支援するという、米山の提言の中に含まれていた考え方を分析の出発点として、三尾の集落の事例をみてきた。どのように活性化するのか、どのように活性化の支援をしたらよいかを考えるためには、区長をしないと地域内のことは分からなかったという区長の言のように、内部者外部者にかぎらず、内側の歴史と現状を、かなりの程度深く知る必要がある。学生実習の例から、現地での聞き取りと観察により歴史と現状の一端を理解する試みを出発点として、現地の人たちとの相互的なやりとりの中から、相互の考え方の違いを見つけだして、自らの理解を深める機会を掴む必要があることが明らかである。個人や家族のレベルで多様な生活の仕方が、一つの集落という場で、複合的に進行していること、そして、その進行には外の大きな流れの影響もあることの理解が、内的外的にかかわらず、創意を生み出す者にとっても支援者にとっても必要となる。

これは意識的な営みを持続的にすることを意味している。多様な個人の存在と、ある集落や地域の活性化を常にどう複合的に組み合わせられるのかを再帰的に考え実践していくということである。こだわりをもって持続させることも場合によっては有効となる。創意して実施に移した営みがすべて活性化に向いているわけではない。現実には営みの方向が多様になり、対立することが生じることがある。この場合においても、対立をどのように乗り越えるのかが、新たな機会を与える可能性をもっているだろう。

新しい機会は、それが到来した後、そのまま持続的に有り続ける保証はどこにもなく、保証されているのは、新しい機会が到来する可能性だけである。このことを認識した上で、持続的な安心で安定した生活の保持ができるようになる一つの方法は、新しい機会を捉えたり受け入れたりして創意することであり、今までになかった連関を柔軟に見出し、連関

的に展開することであろう。その展開の持続には、支援的な動きが今後必要である。そうした外部からの新しい動き（結果的に支援となる動き）を一つの機会として捉えたり受け入れたりして、あるいは、それと連携することによって、活かすことのできることが、内部者外部者にかかわらず地域の活性化に関わる者にとって重要であろう。

謝辞

本研究は、平成 18～19 年度奈良女子大学大学院人間文化研究科社会生活環境学専攻プロジェクト経費からの助成を得て実施された。本研究の実施に関連して、東吉野村三尾地区の前区長・上高垣内純一氏をはじめ自治会役員の方々ならびに住民の皆様方、また月ヶ瀬奈良晒保存会の皆様には学生実習の受入と情報提供をしてくださり深く感謝いたします。

注

1）後半は大学院専攻プロジェクトと重ねておこなった。

参考文献

上高垣内順一　2007「集合研修に対するご感想」日中ビジネス支援事業共同組合編集『研修風景』秋季号(2007.11)

東吉野村史編纂委員会（編）1992『東吉野村史　通史編』東吉野村教育委員会

東吉野村教育委員会（編）1972『東吉野村郷土誌』東吉野村教育委員会

三尾自治会　『三尾自治会だより』No.2(H14.7.1), 3, 14, 16, 24, 25, 26, 27, 32, 33, 37, 42, 43, 44, 46, 48(H19.7.1. 報告会案内、研修生 8 回目受入)

三尾自治会　『中国国際技術知知力合作公司(上海)日本支店から依頼された中国人研修生について』(ca 平成 17 年 6 月)

三尾自治会　『三尾区民センター竣工までの経過』(ca 平成 17 年)

三尾自治会　『理事・幹事会　議題』第 17 回(H17.4), 18(17.4), 19(17.5), 20(17.6), 21(17.7), 22(17.8), 24(17.12), 25(18.1. 研修生 3 回目受入)

米山俊直 1969『過疎社会』日本放送出版協会

Rinne, Melissa M. 2007 Preserving Echigo Jofu and Nara Sarashi: Issues in Contemporary Bast Fiber Textile Production. In Material Choices: Refashioning Bast and Leaf Fibers in Asia and the Pacific. Roy W. Hamilton and B. Lynne Milgram (eds), Los Angeles: Fowler Museum at UCLA.